

神奈川 芸術プレス

vol.163

KANAGAWA ARTS PRESS

2023年(令和5年) 9月21日発行



特集

よりよい社会へ

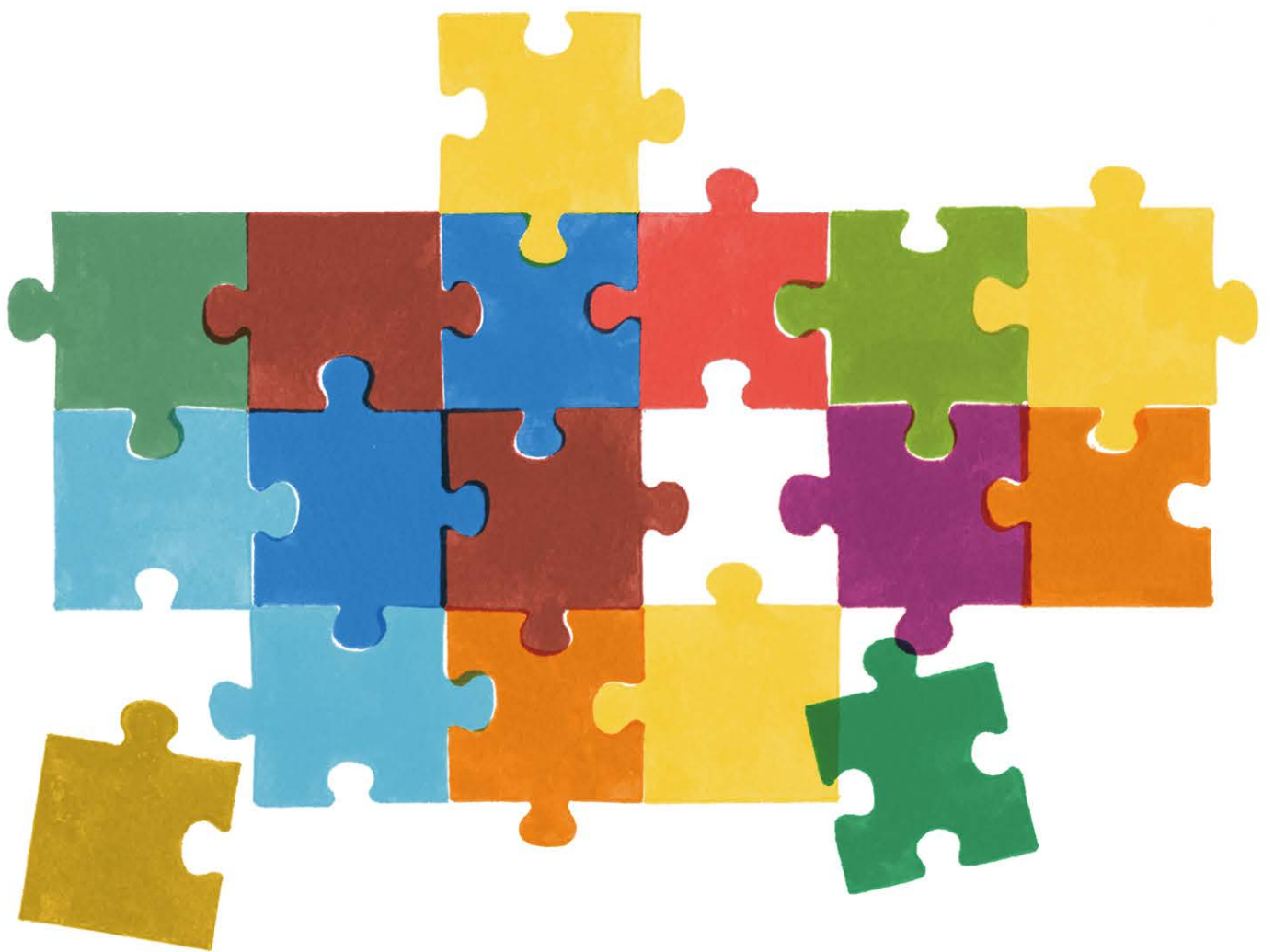
TOPICS 舞台芸術が持続可能であるために、ダンスワークショップ「チャレンジ・オブ・ザ・シルバー」、箱根町の取り組み、さがみロボット産業特区、神奈川大学の社会連携、神奈川県ヘルスケア・ニューフロンティア政策

インタビュー studioFLAT、加来 徹

連載 アートシーンプレイバック、つなぐ——社会と芸術、公演の舞台裏



公益財団法人
神奈川芸術文化財団



TOPICS

1. 舞台芸術が持続可能であるために
2. ダンスワークショップ「チャレンジ・オブ・ザ・シルバー」
3. 持続可能な観光地を目指して——箱根町の取り組み
4. 「生活支援ロボット」がひらく未来——さがみロボット産業特区
5. 教育の現場から——神奈川大学の社会連携

14 インタビュー

大平 暁 (studioFLAT 理事長) / 大槻蒼波 (studioFLAT アーティスト) / 山内健資 (studioFLAT アーティスト)
加未 徹 (バリトン歌手)

16 TOPICS

6. 「未病」に着目——神奈川県ヘルスケア・ニューフロンティア政策

17 連載
REGULAR FEATURE

18 アートシーンプレイバック

2023年上半期のダンスプログラムをふりかえる

文：呉宮百合香 (舞踊評論)

2023年上半期の美術プログラムをふりかえる

文：浦島茂世 (フリーライター)

22 つなぐ——社会と芸術

ミューザの日2023 こどものためのウェルカム・コンサート

23 公演の舞台裏

ピアノ調律師編 河内克彦 (ピアノ調律師)

24 神奈川芸術プレス | 読者アンケート

ご支援のお願い

(公財)神奈川芸術文化財団 賛助会員・協賛・協力・寄付 ご芳名

(公財)神奈川芸術文化財団について

1993年10月に設立された神奈川芸術文化財団は、以下3つの県立文化施設の運営と、芸術文化の創造・普及に一体的に取り組んでいます。

神奈川県民ホール



神奈川県民ホール (以下、県民ホール)

1975年、全国屈指の大型文化施設として開館。大型の舞台機構を備える大ホール、オルガンが設置された小ホール、ギャラリー、会議室等を有する多目的ホールです。オペラ、バレエ、コンサートから各種大会・式典、美術作品の展示まで、多彩な催しが行われています。

〒231-0023 神奈川県横浜市中区山下町3-1
TEL : 045-662-5901 (9:00~17:00)
<https://www.kanagawa-kenminhall.com/>

2023年度ラインアップはこちら

https://www.kanagawa-kenminhall.com/news_detail/2146



KAAT 神奈川芸術劇場



KAAT 神奈川芸術劇場 (以下、KAAT)

2011年、モノをつくる(芸術の創造)、人をつくる(人材の育成)、まちをつくる(賑わいの創出)の「3つのつくる」をテーマとする創造型劇場として開館。最大約1,200席のホールのほかに、大スタジオ(約220席)と、3つのスタジオを有します。

〒231-0023 神奈川県横浜市中区山下町281
TEL : 045-633-6500 (10:00~18:00)
<https://www.kaat.jp/>

2023年度ラインアップはこちら

https://www.kaat.jp/news_detail/2127



木のホール

神奈川県立音楽堂



写真：青柳聡

神奈川県立音楽堂 (以下、音楽堂)

1954年、公立施設としては日本で初めての本格的な音楽専用ホールとして開館。前川國男設計による戦後モダニズム建築の傑作として評価されています。ホールの壁面はすべて木でつくられ、その美しい響きで愛されています。2021年に神奈川県重要文化財に指定。

〒220-0044 神奈川県横浜西区紅葉ヶ丘9-2
TEL : 045-263-2567 (9:00~17:00 月曜休館)
<https://www.kanagawa-ongakudo.com/>

2023年度ラインアップはこちら

https://www.kanagawa-ongakudo.com/news_detail/2154



「よりよい社会」とはどんな社会でしょう。

温暖化をはじめとした環境問題は、地球に生きる私たち一人ひとりと無関係ではありません。

年齢や性別、障がいの有無にかかわらず、私たちが豊かに生きるため、

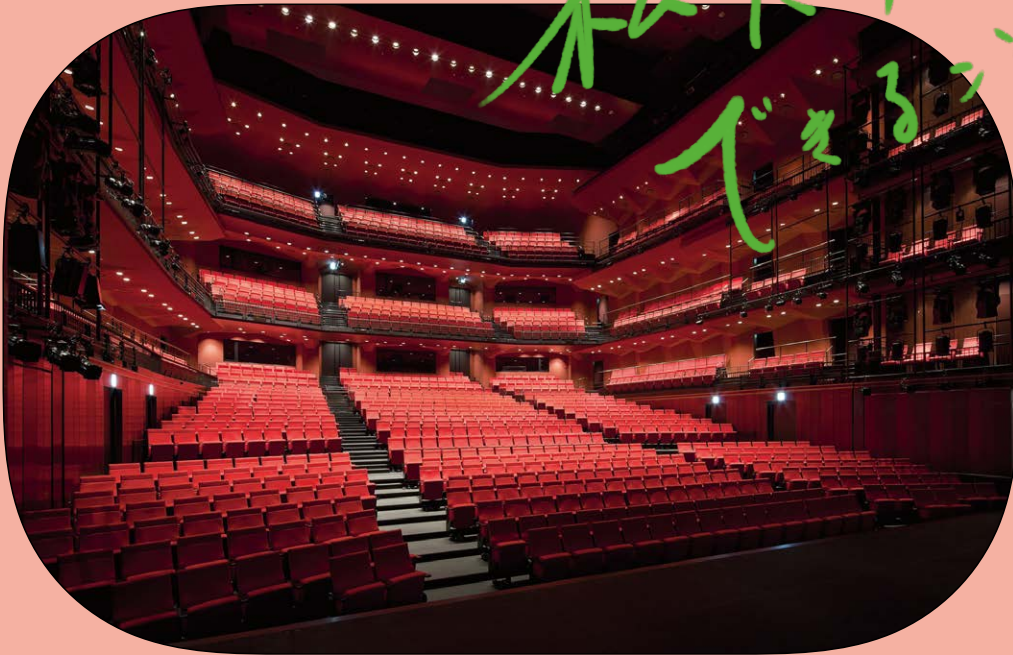
あらゆるジャンルで様々な取り組みが見られます。

これからの社会を変えることができるのは、一人ひとりの意識と行動かもしれません。

読者の皆さまとともに「よりよい社会」について考えていきたいと思います。

特集

よりよい社会へ



TOPIC |

舞台芸術が持続可能であるために

2023年3月、KAAT 舞台技術講座特別編として「劇場がサステナビリティ（持続可能性）を考える～環境に優しい舞台芸術」が実施されました。「人新世に生きるすべてのアーティストが、気候変動という緊急事態をめぐる議論に加わる義務がある」。講座で紹介されたイギリス人演出家、ケイティ・ミッチェルさんの言葉です。舞台芸術業界の課題と現状、KAATでの取り組みについて堀内真人事業部長に、そしてシアター・グリーン・ブックについて舞台美術家の大島広子さんに聞きました。

取材・文：山崎健太

KAATの講座で紹介された「シアター・グリーン・ブック」は、イギリス舞台業界における環境配慮の取り組みについてのガイドライン。幅広い舞台芸術関係者の議論によってまとめられ、2021年に発表されたものです。このガイドラインは舞台芸術のすべてのプロセス、あらゆる側面について、持続可能性を実現するための方法と、業界全体とし

舞台芸術業界の
課題と現状



KAAT 舞台技術講座特別編「劇場がサステナビリティ（持続可能性）を考える～環境に優しい舞台芸術」ディスカッション「舞台芸術がサステナビリティに取り組むということ」ラウンドテーブルの様子。劇場スタッフや舞台美術の専門家など、舞台関係者が集まりました

て達成すべき目標を具体的に記述した画期的なもの。今、世界中の舞台芸術関係者から注目を集めています。

都市部では毎日多くの舞台公演が行われていますが、そこで使われた舞台美術の多くは、公演が終わると廃棄されてしまいます。その一部を保管して再利用するような取り組みが行われることもあります。保管場所や費用、また著作権の問題などもあり、常には実現できるわけではあり

りません。今回の講座のファシリテーターで舞台美術家の大島広子さんは、このような現状をどうにかできないかと国内外の事例を調べていて、シアター・グリーン・ブックに出会いました。

イギリスではすでに、ナショナル・シアターなど複数の劇場で、劇場が組織としてシアター・グリーン・ブックに沿って作品の創作を進める取り組みが始まっています。舞台芸術の持続可能性を高めていくためには、業界全体としてそれに取り組むことが必要なのです。

講座のなかで大島さんは「今日から何ができますか?」と聴講者に問いかけました。そして①物、②輸送・移動、③エネルギー、「3つの減らす」を考



KAAT 舞台技術講座特別編はYouTubeでも公開されています。ぜひご覧ください。

けます。「例えば舞台の現場で使っている養生テープの幅を50mmから38mmに変えるだけで、その行為を止めることなく、消費を24%減らすことができるんです」。

KAATでの取り組み

KAATの堀内真人事業部長は「今後は公演を創作していく時に、環境への配慮ということが、例えば会場となる空間の大きさと同じくらい重要な条件になってくるでしょう」と言います。「長塚圭史芸術監督は、社会にひらかれた劇場を目指しています。持続可能性について考えることは、そういう劇場のあり方にもつながることだと思っています」。

では、具体的には劇場としてどのような取り組みが考えられるので

しょうか。「イギリスでつくられたシアター・グリーン・ブックを、その

まま日本の舞台芸術界に適用することは難しいかもしれません。でも、少し視点を変えてみると、すでに日本で実践されている取り組みもある」

と堀内事業部長は言います。例えば、限られた予算でより豊かな表現を生み出すために、大道具に平台などの汎用資材を利用したり、小道具、衣裳をレンタルするなど、普段行っていることは、実は持続可能性を高めることもつながっています。「まずはこれまで劇場としてやってきたことを捉え直して、例えばどのくらいの物品を再利用・再使用しているのかを見える化することから始めてみてはどうかと。発信力のある公共劇場だからこそ取り組む必要があると思っています」。

一方で、大きな変化が必要とされる部分もちろんあります。「劇場として、これまでにも再演には積極的に取り組んできましたが、これからより一層、ものを捨てないことを考えると同時に、作品をやり捨てないことを考えていきたいと思っています。そのためには、ものだけではなく人にコストをかけるという発想の転換も必要になってくるんだと思います」。



2023年夏に再演されたKAAT キッズ・プログラム『さいごの1つ前』
(2022年初演) 写真:宮川舞子

「シアター・グリーン・ブック」を日本に広めるために

～大島広子さんインタビュー～



インタビューに応じる大島広子さん。
リサーチでイギリスを訪問中、オンラインで

K A A Tでの講座は大島さんが個人で開催したシアター・グリーン・ブックの勉強会をきっかけに企画されたものでした。勉強会には舞台美術家はもちろん演出家やプロデューサー、劇場スタッフ、環境の専門家など、舞台芸術に関わる幅広い職種の方が参加していたそうです。

「環境問題についてはあらゆるセクションを巻き込んで考えていく必要があります。その議論の土台としてシアター・グリーン・ブックがあることは大きいですね。これを基に、では日本ではどうするのかという議論を進めていくことで、業界全体としての合意も形成していくことができるはず。だからまず、これを広く知ってもらうところから始める必要があると思ったんです」

まずはシアター・グリーン・ブックの全文日本語訳を目指すという大島さん。並行してNPO法人を立ち上げ、シアター・グリーン・ブックの普及活動とともに舞台芸術における持続可能性に関する議論や調査研究も進めていく予定だと言います。

「舞台芸術業界における環境問題への取り組みがもたらす影響は、ほかの産業のそれと比べたら微々たるものでしょう。でも、人にメッセージを伝えるということに関しては私たちはプロです。だからこそ、私たち自身が環境問題に取り組む、それを発信していくことで社会に影響を与えることができると思うんです」

取材・文：編集部 写真：加藤 甫

ワークショップの冒頭、参加者みんなの自己紹介で聞くのはいつも「どこから来たか」だけ。今まで何をしてきたかには触れません。大事ななのは「どこから来て、今ここにいる」ことだと安藤さん

年齢を重ね、老いることは、誰にも等しく訪れます。シニア世代が充実した生活をおくることには、これまで以上に意識が向けられるようになりました。「チャレンジ・オブ・ザ・シルバー」は60歳以上の方たちを対象としたダンスワークショップ。身体について新たな発見をしたり、身体表現を探求していくプロジェクトです。じわじわと参加者の輪が広がるワークショップの現場をレポート。プロジェクトリーダーの安藤洋子さんに、お話を聞きました。



身体表現で



安藤さんが一人ひとりの身体に触れながら、筋肉ではなく「骨」を動かそうと意識を促していきます

参加者が友人・知人に声をかけ、新たにメンバーが参加するケースも。編集部が取材した2023年5月のワーク

「チャレンジ・オブ・ザ・シルバー」が出演しています。安藤さんと参加者、そしてスタッフによるチームは、まるで一つのカンパニー。入れ替わりはありながらも、プロジェクトの参加者は増え続けています。

安藤さんと参加者が立ち上げる新たなダンス表現を、ぜひ目撃してください。

安藤さんが一人ひとりの身体に触れながら、筋肉ではなく「骨」を動かそうと意識を促していきます

「ともに生きる社会かながわ」の実現を目指す神奈川県。文化芸術の分野でも、年齢や障がいなどにかかわらず、子どもから大人まですべての人が舞台芸術に参加し楽しめる「共生共創事業」に取り組んでいます。なかでも今回取り上げるのは、世界の第一線で活躍してきたダンサー・安藤洋子さんが、60歳以上のシニアとともにダンス表現を探求するプロジェクト。その名も「チャレンジ・オブ・ザ・シルバー」です。2019年からワークショップをスタートし、2020年度以降は年間を通してワークショップをひらき、年度末に成果発表を行うかたちで活動を継続しています。

また2022年度には「ねんりんピックかながわ2022総合開会式」のオープニングアクトに「チャレンジ・オブ・ザ・シルバー」が出演しています。安藤さんと参加者、そしてスタッフによるチームは、まるで一つのカンパニー。入れ替わりはありながらも、プロジェクトの参加者は増え続けています。

コロナ禍での活動を余儀なくされた2020年度は、オンラインレッスンも交えながら、その成果を映像作品として発表。YouTubeで公開しました。60歳以上の方たちが発する身体の内存在感と美しさ。映像を通して伝わるその力に、多くの方から反響があった作品です。

プロジェクトリーダーの安藤さんは、横浜出身。鬼才の振付家ウィリアム・フォーサイスの下でドイツを拠点に15年間、カンパニーのメインソロダンサーを務めてきました。世界を舞台に活躍してきた安藤さんが、シニアとともにダンスをつくりはじめて、まる4年。参加者の方々とは「出会うべくして出会った」ような感覚があると話します。

「弓矢を射てみよう」というワーク。「目に見えないものが身体を通して、ほかの人に見えるようになることが身体表現」だと安藤さん。自分の身体を信じようと伝えます



シニア世代に充実を

安藤 洋子

振付家・ダンサー／
「チャレンジ・オブ・ザ・シルバー」プロジェクトリーダー



世界的なダンサー・振付家であるウィリアム・フォーサイスから

「自分の身体を感じている状態を、そのまま置けばいい」と教わってきた安藤さん。「それを信じて、表現していきたいと思っています」

——活動を始めて4年になります。60歳以上の皆さんとの創作はいかがですか？

私は人間の先輩として、皆さんのことを尊敬しています。稽古場ではお互いにリスペクトをしていて対等な感じ。それがとても好きですね。歳を重ねると若い人よりは「死」に近いので、例えば生死についても自然に話せる。今を生きるということをお伝えしやすいんですよ。「自分が何者であるか」を考えつくしてきた方々なので、これから何かならうという欲もなく。一緒にやっていて楽しんでいますかね。

ダンスは教えるものではなく、身体で感じるもの。武道では、身体は60歳から実っていくという考え方もあります。そう考えると希望もありますし、だからこのプロジェクトでは身体のことを丁寧に、気負わずやっていますね。

——今日のワークショップでも、「身体の声聞く」ことを大事にされていましたね。

日々、身体は周囲のいろんな変化に対応して、私たちに訴えかけていると思うんです。それに耳を

貸してみる。自分自身が誰よりも自分の身体に寄り添うことで、いい循環が生まれるのではないのでしょうか。例えば今日は、足の裏のこと。そこに意識を向けると、どんな変化が起こるのか。皆さんがふとした時に転びにくくなる——といったこともあるかもしれません。高齢化社会が進むなか、一人ひとりが好奇心を持ち続け、生きていることを楽しめたら。

——持病があっても、プロジェクトに参加してから「痛み」との向き合い方が変わったという参加者もいらっしやいます。

誰もが「健康でいなければ」と思ってしまうかもしれませんが、そんなことはなくて。自分が居た



孝道山本仏殿にて

「チャレンジ・オブ・ザ・シルバー」小田原公演決定！

.....
コロナ禍もあり、これまで「公演」というかたちでは発表の機会がなかったプロジェクト。満を持しての公演です。「身内の方だけでなく、まったく知らない人やどんな世代の方が観てもカッコいいと思ってもらえる舞台を目指す」と安藤さん。「このプロジェクトでは、皆さんが立つことで生まれるいい瞬間をたくさん見てきました。録り直しや編集ができる映像作品ではなく、それを舞台上、お客さんの前で出せるかどうか。そこにチャレンジしたいと思っています」。

2024年1月27日(土) 会場：小田原三の丸ホール

.....

いように居ればいいんですよ。このプロジェクトではダンスをつくりませんが、必ずしも何かを生み出さなければいけないわけではない。今まで気づかなかったことを発見したり、新しい考え方に触れるといった些細なことでも、十分意味があると思うんです。

私自身、老いることへの恐れがあるから、皆さんとやっているのかもしれない。特にダンサーは「元氣じゃない」と思ってしまうがち。だからこそこのプロジェクトに向き合って、豊かな命の循環が見たいですね。

箱根町の取り組み

取材日は、からっと晴れた新緑の箱根湯本。平日の昼間から、海外からの観光客を多く見かけました



リサイクルや
代替エネルギー

神奈川県民にとって、最もポピュラーな観光地の一つである「箱根」。ポーラ美術館をはじめ、自然とともに芸術文化に触れられるスポットもたくさんあります。そんな箱根町が今「サステナブルツーリズム」に取り組んでいることをご存じでしょうか？ 2022年にはグリーン・デスティネーションズによる「世界の持続可能な観光地トップ100選」に、箱根町が選出されました。箱根DMO（一般財団法人箱根町観光協会）専務理事の佐藤守さんに、お話を伺いました。

サステイナブルな町

箱根町が抱えてきた課題

「箱根町は少子高齢化のトップランナー。約60年前には2万5千人ほどだった人口が、現在は1万2千人を切っています」と佐藤さんは切り出します。観光地であり、そこに住まう人々の生活の場でもある箱根。日本中の多くの自治体と同じく、人口減少は町の存続に関わる喫緊の課題でした。火山帯に位置することもあり、一次産業や二次産業がない箱根では、観光業が町の財源の命綱となっています。

佐藤さんが専務理事を務める箱根DMO（一般財団法人箱根町観光協会）は、箱根町観光協会と、財団法人箱根町観光公社が統合した組織。「町全体を一つの会社と考えて、町の課題を挙げる。それらを官民一体ALL箱根で、観光面で取り組んでいます」と佐藤さんは話します。箱根DMOは箱根町の現状に対し、サステナブルに資する取り組みを「課題設定」して、「つたえる」活動をしています。

前述の課題を抱えている町ですが、なぜ箱根DMOはサステナブルにかじを切ったのでしょうか？ 箱根は、首都圏から一番近い観光地。そのため特に「欧米豪」からの観光客が最初に訪れる「日本のリゾート温泉」になることが多い地です。近年それらの国々は、環境に対する意識が高い。そのためサステナブルツーリズムに取り組むことは、観光客に町への親しみを感じてもらふことにつながります。さらにはZ世代と称される若者たちへのアプローチ。小学校の教科書にもSDGsが登場し、若い世代の環境問題への関心は急速に高まっています。

これらの層を中心に、箱根DMOは多世代へ

向け「サステナブルツーリズム」を発信していきます。その具体的な取り組みの事例を見ていきましょう。

「ペットボトル水平リサイクル」と「バイナリー発電」

「ペットボトル水平リサイクル」とは、ペットボトルをペットボトルとして再利用するシステムのこと。箱根DMOが、国立公園オフィシャルパートナーと協働して取り組んでいます。

水平リサイクルの実現のためには、ラベルやキャップを取り外し、中身がきれいな状態で捨てる必要があります。「そういった小さなリサイクルへの意識は、皆さんもご家庭やオフィスではできているかもしれませんが、しかし意外と街なかのコンビニなどでは、できていないのではないだろうか」と佐藤さんは指摘します。

箱根DMOでは、啓発ポップの作成や、ペットボトルの状態が外から見える「透明リサイクルボックス」の設置を行ってきました。この結果、事業ゴミでは、水平リサイクル用のペット



透明リサイクルボックスが置かれている様子

ボトル数が大幅に増える効果も見えてきたそうです。「実効性を上げることはもちろんですが、指針になることが大切だと考えています。『箱根では水



箱根湯の花プリンスホテル バイナリー発電施設(PR TIMESより)

箱根湯の花プリンスホテルはバイナリー発電設備を導入することで購入する電力量を抑え、CO₂排出量の削減とカーボンニュートラルに向けた取り組みに寄与しています。

DMOのMはマーケティングのMです。箱根

箱根はターゲットを絞らない

箱根DMOが町のことで何かを決める時、合意形成を図るのが「箱根DMO戦略先進委員会」です。このプラットフォームには事業者や旅館、各地域の観光協会など、箱根町で活動する様々な団体が集まり、戦略を立て実行しています。ここに「世界の持続可能な観光地トップ100選」を認証している団体があるらしい」と話をもちかけたのは、箱根町出身のプロガイド・金子森さんでした。これをきっかけに持続可能な観光地の国際的な認証団体「グリーン・DESTINYネーションズ」への応募に向けて、議論がスタート。佐藤さんは「一から何かをやらずに、箱根がこれまで積み重ねてきたことを中心に書けば、認証を得られるのではないかと考え応募することにしました」と振り返ります。

次に訪れる時には、海外の観光客から若者、車椅子の方や子どもまで、多世代に向けた箱根の「サステナブルツーリズム」をぜひ感じてみてください。



箱根DMOが制作した「車いすで巡る箱根旅観光MAP」

世界の持続可能な観光地 トップ100選に選出

箱根DMOが町のことで何かを決める時、合意形成を図るのが「箱根DMO戦略先進委員会」です。このプラットフォームには事業者や旅館、各地域の観光協会など、箱根町で活動する様々な団体が集まり、戦略を立て実行しています。ここに「世界の持続可能な観光地トップ100選」を認証している団体があるらしい」と話をもちかけたのは、箱根町出身のプロガイド・金子森さんでした。これをきっかけに持続可能な観光地の国際的な認証団体「グリーン・DESTINYネーションズ」への応募に向けて、議論がスタート。佐藤さんは「一から何かをやらずに、箱根がこれまで積み重ねてきたことを中心に書けば、認証を得られるのではないかと考え応募することにしました」と振り返ります。

旅行関係の会社社長に長年勤め、観光業をつぶさに見てきた佐藤さん。「旅行一回にける思いは、人によって全然違います。例えば最後の旅行になるかもしれないおばあちゃんを連れての家族旅行。箱根は首都圏から近いので、そういう目的地になる可能性が高い。だからこそ、どんな人にもやさしい観光地じゃなきゃいけないと思うんです」。

普段旅行に行きにくい車椅子の方や、小さい子どもにもフレンドリーな観光地であることは、箱根町が大切にしてきたテーマです。2022年からスタートした「ユニバーサルツーリズムプロジェクト」では、社会福祉協議会と協働し、各観光スポットでのバリアフリーに関する情報などを紹介する冊子を制作しました。



箱根DMO
(一般財団法人箱根町観光協会)
専務理事の佐藤守さん

「KAATカナガワ・ツアー・プロジェクト 第二弾」では、箱根山が舞台の一つに！

2021年度に好評を博したKAATカナガワ・ツアー・プロジェクト。長塚圭史芸術監督が〈ひらかれた劇場〉を目指して県内各地をリサーチし、上演台本・演出を手がけた作品を携え神奈川県内を巡演しました。その第二弾が今年度、KAATと県内5会場をめぐる。物語の舞台は、箱根山と三浦半島。ご期待ください！

『箱根山の美女と野獣』『三浦半島の人魚姫』 2024年2月3日(土)～2月12日(月・休) KAAT(中スタジオ)

【県内ツアー】〈座間公演〉	2024年2月17日(土)、18日(日)	ハーモニーホール座間
〈川崎公演〉	2024年2月21日(水)	川崎市アートセンター
〈小田原公演〉	2024年2月24日(土)、25日(日)	小田原三の丸ホール
〈逗子公演〉	2024年2月28日(水)	逗子文化プラザホール
〈茅ヶ崎公演〉	2024年3月2日(土)、3(日)	茅ヶ崎市民文化会館

1 GSTC(グローバル・サステナブル・ツーリズム協議会)が認定している第三者認証機関

ツレからの産業を
サポート



自然災害や、人材の不足など、私たちの身近にある様々な課題を解決するため、神奈川県は「生活支援ロボット」の実用化と普及に取り組んでいます。2013年に国から指定された「さがみロボット産業特区」では、法令の規制緩和や実証実験のサポートを行い、生活支援ロボットの実用化を促進しています。神奈川県の担当者や、ロボット開発者の方にお話を伺いました。

神奈川県（産業振興課）の山岡清志さん（右）、
新堀友真さん（左）、株式会社移動ロボット研究
所の小柳栄次さん（中央）

取材・文：浦島茂世
写真：大野隆介

さがみロボット産業特区とは？

私たちの生活には少子高齢化が遠因の人材不足や、地震や台風などで発生した災害の復旧作業など、様々な課題や困難があります。人間の活動をサポートする「生活支援ロボット」は、このような状況を変え得るもの。その実用化と普及を目指し、神奈川県は「さがみロボット産業特区」において、ロボットを開発するうえでハードルとなる法令の規制緩和を行ったり、実証実験などをサポートしたりしています。同特区は、さがみ縦貫道路（圏央道）周辺の相模原市から藤沢市まで全12市町を対象区域としたもの。日本には様々な「特区」がありますが、ロボットを銘打っているのは現在のところ神奈川県のみです。

このさがみロボット産業特区に参画する企業のひとつが、株式会社移動ロボット研究所です。同社は、東日本大震災の時に、東京電力・福島第一原子力発電所の原子炉建屋内に投入された先行探査型移動ロボットをはじめ、災害対応やプラントの保守点検を行うものなど、様々なロボットを開発する企業です。さがみロボット産業特区で開発した「コロナウイルス感染対策除菌ロボット」は、人による遠隔操縦と、自立移動機能をもつハイブリッド型の除菌ロボット。アフターコロナの社会でも、人材不足の解決に寄与できるロボットとして、これからの活用期待が高まっています。

開発中の「コロナウイルス感染対策除菌ロボット」。
中心部に除菌・滅菌ができる紫外線ランプが取り
付けられています



神奈川県
(産業振興課)株式会社
移動ロボット研究所

進行：(公財)神奈川芸術文化財団



「神奈川県の特区制度を活用し、より勢いのある開発体制を構築しています」(小柳さん)

「文化施設にもロボットが活躍する場をつくりたいですね」(新堀さん)

「今後、生活支援ロボットはますますニーズが高まります。神奈川県では生活支援ロボットの開発だけではなく、その先に生まれる産業全体を盛り上げていきたいと考えています」と話すのは、さがみロボット産業特区を担当する神奈川県産業振興課の新堀友真さん。

「生活支援ロボットは、全世界的に注目が集まっている分野であると同時に、まだまだこれから市場規模の成長が期待される分野です。この特区からいち早く世界に羽ばたくロボットが生まれるよう全力でサポートしています」と、特区をロボット産業の国際的な中心地にするべく奮闘しています。神奈川県芸文財団が運営する県民ホール、KAAAT、音楽堂といった県立文化施設の現場でも、生活支援ロボットの導入を検討したことがあり、同財団は神奈川県の取り組みに興味・関心を寄せています。例えば演劇の舞台では、道具の搬入や設置など力仕事も多くあり、スタッフの身体に負担がかかります。以前、介護の分野などで力仕事をサポートしてくれるパワードスーツが発表された時、劇場・ホールでも活用できるのではないかと、調べたこともありました。また、新型コロナウイルス感染症対策のために、舞台上からロ



環境認識をするセンサー部は、共同企業の株式会社人工知能ロボット研究所が開発。有人空間では紫外線ランプが閉ざされ、床面のみを除菌します

ビー、客席、稽古場や楽屋など、すみずみまで清掃・除菌しておく必要があります。アフターコロナのよりよい施設運営は文化施設における重要な課題です。

移動ロボット研究所の小柳栄次さんは、「現在開発中の『コロナウイルス感染症対策除菌ロボット』は、感染症対策で増えた負担を軽減することもできるでしょう」と語ります。ロボットは、人を感じた時は床面のみを除菌し、無人の時は除菌力の強い紫外線ランプを壁面に照射するなど、状況に応じた働き方を自分で選ぶことができます。

また、自動運転の技術を組み込んでおけば、夜間、スタッフが休んでいる間に稼働させることもできるそう。「元々のロボットは、病院など、不特定多数の人が多く集まる場所の除菌を想定して設計されました。だから、劇場やホールなどでも活躍できるはずです」

と小柳さん。現在、全国各地の劇場やホールの多くは、スタッフの手によってすみずみまで除菌を行っています。この作業をロボットが行うようになれば、スタッフはより高度な仕事に集中できるようになり、劇場やホールはより快適な環境になるでしょう。今後、ロボットが劇場やホールの特性を学習し、作業することで、より安心・安全でバリアフリーな環境をお客さまへスムーズに提供することも期待できそうです。

日本ではすでに、ファミリーレストランの配膳や、家庭やビル清掃などで、生活支援ロボットが普及しはじめています。小柳さんによると、今後、社会にはさらにロボットが進出するそう。「例えば、カメラとセンサー機能のあるロボットに、ホールや劇場の複数ある出入り口から空いているところを見つけてもらって、お客さまをそちらにすみやかに誘導してもら

う。そんな誘導係ロボットが誕生する未来も来るかもしれません。今後、段差をなくす、通路の幅を広くするなど、人間はもちろんロボットの稼働も考える。ロボットフレンドリーという考え方が広まっていくでしょう」とのこと。

すでにある施設のなかには、人間に配慮するのと同じように、ロボットにも配慮した設計になっている場所もあるそうです。今後建てる場所にも、設計の段階からロボットの稼働を考慮に入れていくことが、求められる社会になってきているのです。「人間が過ごしやすい環境はロボットも働きやすい。逆に言えば、ロボットばかり開発していても、ロボットを導入する施設や人がロボットにやさしくないと発展していきません。そのための環境づくりも合わせてバックアップしていきたいと考えています」と、神奈川県の山岡清志さんも展望を語ります。今年で11年目となる「さがみロボット産業特区」。ロボット化による省エネルギー化は、脱炭素に寄与する側面もあり、これからの社会により必要とされていくでしょう。これから生まれる新しいロボットが、未来を変える一助となるかもしれません。

神奈川大学みなとみらいキャンパスの様子。「ソーシャルコモンズ(人と知の交流拠点)」を打ち出し、様々な社会連携活動を展開。学生だけでなく、地域にもひらかれたキャンパスです

学生たちの学び

取材・文：編集部

2023年、95周年を迎えた神奈川大学。港町・横浜の産業につながる「真の実学」教育に力を入れてきた大学です。2021年4月には都市型・未来型の「みなとみらいキャンパス」を新たにオープンし、話題を集めました。また同学では2021年度から、持続可能な開発目標(SDGs)達成に向けて、課題解決策などをポスターで表現する「神奈川大学SDGsアワード」を開催しています。2023年4月に新設された情報学部・秋吉政徳教授の研究室を訪問し、これからの未来を担う学生たちの学びを取材しました。

これらの外部の連携先との窓口として、学内外をコーディネートしているのが「社会連携センター」です。みなとみらいキャンパス内にオープンした実験工房「ファブラボみなとみらい」の運営も、同センターが担っています。ファブラボの学外会員数は220名以上。「周辺企業にお勤めの方やクリエイター、市内の小中高生など様々な方が利用しています。学生との自然な接点も生まれています」と、社会連携センターの市川洋行さんは市民にひらかれたファブラボの手ごたえを語ります。

神奈川大学では、産・学・官・民が連携したプロジェクトを積極的に展開しています。その目的は、環境・経済・社会的な課題の解決をはかること。「観光」を柱としたプログラムでは、横浜市港湾局、郵船クルーズ株式会社に向けた魅力発掘プログラムを提案したり、ニューカレドニアの観光局や航空会社と連携したり。社会に直結した実践プログラムの数々に、驚かされます。

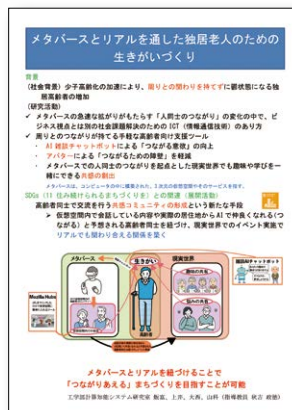
社会課題の解決に取り組む 神奈川大学



個人による自由なもののづくりの可能性を広げる実験工房「ファブラボ」。個人では所有するのが難しい3Dプリンターやレーザー加工機などのデジタル工作機器が利用できます

神奈川大学SDGsアワード

..... 神奈川大学では在学生を対象に、SDGsに関連した研究・取り組みや、課題解決に役立つアイデア等を募集するポスターコンクール「神奈川大学SDGsアワード」を開催しています。2021年度から始まり、2023年度は3回目の開催を予定しています。2022年度は、一次選考を通過した10グループが最終選考としてプレゼンテーションを行い、審査により受賞作品を決定しました。このSDGsアワードも行政の後援や、企業・団体などの協賛を得ており、最優秀賞、優秀賞などに続き、横浜銀行賞、京セラ賞といった協賛企業の名前を冠した賞も。同イベントの運営も、社会連携センターが担っています。2022年度のも最優秀賞には、環境や性能面で優れたかやぶき住宅の研究・普及に取り組むチームが選ばれました。若い世代の感性を生かし、課題解決の一歩にしていこうと、様々なアイデアのポスターが見られました。



神奈川県民共済生活協同組合賞を受賞した秋吉研究室「メタバースグループ」のポスター

秋吉政徳 教授

研究室学生の皆さん

独居高齢者に生きがい

人工知能で豊かな未来へ

聞き手・文：山崎健太
写真：大野隆介

和気あいあいとした雰囲気秋吉研究室。先生と学生の距離が近く、学年を超えた交流も盛んなのだとか

先端技術はよりよい社会の実現に、どのように寄与するのでしょうか。2022年度の「SDGsアワード」では、人工知能の研究を行う秋吉政徳教授の研究室学生のチーム「メタバースグループ」が、神奈川県民共済生活協同組合賞と、ベストプレゼンテーション賞を受賞しました。立案したのはメタバースを使って独居高齢者に生きがいをつくり出すプロジェクト。高齢者がメタバース？という疑問が浮かびますが、メタバースへと誘導するために、まずは自宅に置かれたAI搭載のチャットボットとの会話からスタートするのだそう。チャットボットに誘われて参加するメタバースでは、自分の分身となるアバターを通じてほかの参加者と交流することができます。「メタバースだと、相手が自分と同じ場所にいるような感覚で、より身近に感じられるんです」と学生の一人は言います。さらに、会話を盛り上げ交流を促進するため、例えば会話に出てきた思い出の風景を周囲に再現したりもすることができるといいます。メタバースならではの共通の趣味をもつ仲間を見つけた時は、もちろん現実世界で交流することもできます。そうしてメタバースと現実とを行き来して交流を深められることは、このプロジェクトの重要なポイントの一つです。メタバースと現実をつなぐことで共感コミュニケーションをつくり出すことは、「住み続けられるまちづくり」につながるからです。アワードのプレゼンでは

学生が高齢者になりきってメタバース体験の寸劇を披露したとか。

2021年度にもアワードに参加していた秋吉研究室。その時のプロジェクトは災害時の都市における避難シミュレーションに関するものでした。「人工知能というのは、人間に寄り添って生活を豊かにしてくれる、そういうものを目指すべきだと考えています」と秋吉先生は言います。

秋吉研究室では人間の感情や感覚といった右脳のものを人工知能で扱う研究もしています。人工知能で「ゆるかわ」「ぶさかわ」「きもかわ」を判別する研究もその一つ。担当した学生は「このような感覚的な言葉を人工知能が理解するようになっていくことで、いずれは、例えば孤独のような人の感情にも人工知能は寄り添えるようになるのではないかと」期待を口にしていました。これからの未来を切りひらいていくのは、秋吉研究室の皆さんをはじめ、今学びの舎にいる若者たち。最後に秋吉先生に学生への期待を聞きました。「自分が学生の頃と比べると、世の中の変化のスピードが速くなっているし仕組みも複雑になっています。だから学生に画一的な価値観を押し付けるつもりはないですけど、よりよい社会に、ということこそ重要だと思います。特に日本では同調圧力が働き、自分自身の考えを発信することが難しくなっています。学生には、大学での学びや失敗を通して、自分なりの価値観をもって社会に向き合ってほしいですね」。



コロナ禍で実施できなかった研究室合宿も、今年から再開すること。期待がふくらむ学生の皆さん

情報学部・システム数理学科 秋吉政徳教授



「『障がい者アート』という言葉をなくす」——。

川崎市を拠点とし、障がいのある人たちのアート活動支援と経済的支援を行う

NPO法人studioFLAT(スタジオフラット)の活動。所属アーティストの

大槻蒼波さん、山内健資さんにも同席いただき、理事長の大平暁さんにお話を聞きました。

——studioFLAT発足の経緯を教えてください。

美術の修士号取得後、障がい者施設で美術講師をしていました。転機はこだわりの強い男性との出会い。彼との向き合い方にずっと悩んでいました。ある日、自分が怪我しちやって。すると彼が絆創膏を手に駆け寄って来たんです。アートを媒体に、通じ合えていたと気づきました。彼の作品を世に売り出したい。そう思っていた矢先に彼は早逝してしまっただけで叶いませんでした。だから、障がいのある人たちのアート活動を支え、経済支援にもなる活動を始めました。

——生活介護事業所であり、地域にひらかれたアトリエとお聞きしました。どんな作品を制作しているのですか？

大槻さん(写真左)は花のような点描の抽象画を描きます。彼女は川崎市から依頼を受けたり、作品がグッズとして販売されたりと今ではエース作家です。山内さん(写真中央)は独自キャラクターを描く人。好きな動物を子どもに教えてもらって絵画にするワークショップも開きます。街の子どもからは「絵の上手なお兄さん・お姉さん」と思われているようです。絵画以外は、「さをり織り」があ

山内 健資 Takeyoshi Yamauchi

studioFLAT アーティスト

障がいの有無に関係なく
評価してほしい

「障がい者アート」などの冠を外して、

studioFLAT アーティスト

大槻 蒼波 Aoba Otsuki

PROFILE

大平 暁：NPO法人studioFLAT理事長。

1971年生まれ、多摩美術大学絵画専攻修士課程修了。

障がいの有無にかかわらず、アート作品の魅力を「フラット」に見てもらう活動続ける。

大槻蒼波：1998年生まれ。自身の内面世界を表す、花火のような作品を制作している。

色鮮やかで迫力のあるその作品は、毎日少しずつ丁寧に描き続け、積み重ねるようにしてできあがる。

山内健資：1990年生まれ。オリジナルのストーリーとともに、

ユニークで愛嬌のあるキャラクターを生み出している。

川崎市のノベルティグッズや地域交流のワークショップなど、社会と関わった活動を行う。



「さをり織り」と実際に使用されている織り機

聞き手・文：編集部 写真：大野隆介

大平 暁 Satoru Odaira

studioFLAT 理事長

ります。織り機を施設外に持ち出して、多様な人とともに織りました。素材は川崎市内の廃材です。2022年に県民ホールであった「オープンシアター2022」では、さをり織りを展示し、山内さんのワークショップも開きました。廃材も工夫すればアートになりますし、地域社会とのつながりも築けました。

——よりよい社会に向けて思うことは？

「障がいがあるから才能がある」と言われることもあります。しかし、絵画の良し悪しに障がいは関係ないはず。冠を外して、素直に作品が評価される社会になってほしいです。

オペラ、歌曲、古楽といったクラシック音楽から

ミュージカル、映画音楽まで、

幅広いフィールドで活躍するバリトン歌手の加来徹さん。

その柔軟な感性はいかにして育まれたのか、お話を聞きました。

——音楽との出会いについてお聞かせください。

子どもの頃からヴァイオリンを習っていて、中高の部活ではオーボエやサクソスを吹いていました。クラシック曲を吹奏楽の編成で演奏するクラブだったので、オーケストラには自然と興味をもつようになりましたね。一方で、実家が教会付属の幼稚園をやっていたので、オルガン伴奏で讃美歌を歌うことは身近でしたし、家では父が好きだった現代音楽が流れていたり。ジャズの演奏もしましたし、あらゆる音楽に垣根なく触れていたおかげで、今でもいろいろなジャンルのコンサートに行くのが好きです。

——そこから、歌の道に進んだ理由は？

音楽を仕事にしていきたいと思い、音大受験のために高校時代から歌を習いはじめました。ですから正直なところ、「歌手になりたい！」という強い気持ちで始めたわけではないんです。大学ではドイツ歌曲を勉強し、大学院を修了する時に二期会オペラ研修所に入って、同時期にバツハ・コレギウム・ジャパン（BCJ）でも歌わせていただくようになって。様々な出会いに恵まれて、歌の世界にのめり込んでいきました。

加来徹 Toru Kaku

バリトン歌手

多様な価値観を伝えたい——
古楽の精神に学ぶことは多い



PROFILE

東京藝術大学大学院首席修了。
バツハ・コレギウム・ジャパン声楽メンバーとして、ソリストで活躍。
オペラでも、日生劇場『ドン・ジョヴァンニ』題名役、二期会『金閣寺』鶴川、『こうもり』ファルケ等で、好評を博す。
テレビ朝日「題名のない音楽会」、NHK「名曲アルバム」等出演。
最新アルバムは《A Time for Us - 歌道 II-》。二期会会員。

——バツハを歌う時と、ミュージカルを歌う時とでは、意識は違うのでしょうか？

ミュージカルはマイクをつけて歌うのでテクニク的には違いますが、BCJで学んだ古楽の精神は、ジャズやロック、ミュージカルにも通じるものだと思います。というのも、バツハというと厳格なイメージですが、実はすべての音を正しく合わせて演奏することが本来の目的ではありません。作曲された当時の古楽器で演奏する際、そもそも楽譜通りに音を100パーセント合わせるのには難しい面もあります。むしろ決めるところを決めつつ、自由に個性を表現するという魅力があると思います。

——古楽との出会いは、加来さんにとって大きなものだったと。

そうですね。ミスが許されない今の時代、古楽の精神に学ぶことは多いのではないのでしょうか。音楽に限らず、完璧を求め続けるだけでは燃え尽きてしまします。それだけではない多様な価値観を、音楽を通して伝えることができたと思っています。



第55回クリスマス音楽会
ヘンデル「メサイア」全曲に
ソリストとして出演（2022
年12月11日、神奈川県立
音楽堂）
写真：ヒダキトモコ

聞き手・文：原典子 写真：大野隆介

取材・文：編集部

未病って何？

全国屈指のスピードで高齢化が進むと見込まれる神奈川県。この超高齢社会を乗り越えていくために県が打ち出したのが「ヘルスケア・ニューフロンティア政策」です。「未病」に着目し、個人の未病改善を推進する取り組みについて、神奈川県政策局 いのち・未来戦略本部室の皆さまにお話を聞きました。「未病改善」と「最先端医療等の追求」の2つのアプローチを融合し、持続可能な社会を目指します。



日常生活で気軽に取り入れられる未病改善について
Instagramで発信 公式アカウント：@mebyostyle

私たちの心身は、どのような状態が健康で、どのような状態が病気になるのでしょうか？ 実は明確に二分化できるものではありません。疲れがとれない、胃腸の調子がよくない、肩こりがひどい……。そんな病気とまでは言えないけれど、心身が芳しくない状態は、誰もが経験したことがあるのではないのでしょうか。このように健康と病気の間を連続的に変化

する過程を「未病」と呼びます。東洋医学では古くから考えられてきた概念ですが、これに向き合い、心身を健康な状態に近づけていく「未病改善」がホットトピックとなっています。

神奈川県では、2014年に未病の概念を普及するために「ME-BYO」を商標登録し、2017年にはすべ



2023年にME-BYO BRANDとして認定された「ベジチェック」(カゴメ株式会社)。手のひらをセンサーに30秒あてただけで、簡単に推定野菜摂取量を測れます

神奈川県が未病改善として挙げた3本の柱は「食」・「運動」・「社会参加」です。神奈川県政策局いのち・未来戦略本部室担当課長の長澤未来さんは、この3本の柱について次のように話します。



ME-BYO BRANDの休養時専用ウェア「リカバリーウェア」(株式会社ベネクス)。ナノプラチナなどの鉱物を繊維一本一本に練り込んだ特殊素材を使用。アスリートから一般の方まで幅広く愛用されています

特に重要視して

「超高齢社会を幸せに生きる」ためには、これまで取ってきた手法で解決していくのは難しい。そこでスタートしたのが「未病の改善」と「最先端医療・最新技術の追求」という2つのアプローチを融合させた「ヘルスケア・ニューフロンティア政策」です。2017年には国の「健康・医療戦略」にも、未病の定義が位置づけられました。

いるのが、社会参加。様々な人と交流をもち、社会とつながることによって未病改善を進めていくこととしているところが大きな特徴です。また個人が日常生活に気軽に取り入れやすいよう、未病改善をスタイリッシュに取り入れたライフスタイルを「ME-BYO STYLE」として発信しています。ヨガインストラクターなどのアンバサダーたちが、SNSなどを通じて、この「ME-BYO STYLE」を広める活動も。

個々の未病改善とともに、ヘルスケアの分野でイノベーションを起こし、新たな市場産業の創出を図ることも力を入れています。例えば、未病改善を産業界としても支える「未病産業研究会」。2014年の設立当時の会員数は64社でしたが、現在はヘルスケア関連企業や医療機関、金融業やサービス業、小売業など多様な業種業界から1057社の登録



ME-BYO BRANDの無料アプリ「みんチャレ」(エーテンラボ株式会社)。ダイエットや勉強など同じ目標をもった匿名5人でチームを組み、仲間と取り組むことで三日坊主を防止する習慣化アプリ



REGULAR FEATURE

本誌では、毎号以下のコンテンツをお届けします。

アートシーンプレイバック

コロナ禍以前の活気を取り戻し、意欲的に制作された「ダンス」プログラムや、より身近にアートを楽しめる「美術」プログラム。
県内の2023年上半期のそれぞれのアートシーンをふりかえます。



＼新連載／ つなぐー社会と芸術

あらゆる人たちが芸術文化に親しむことができるよう、
神奈川県内の文化施設や団体では様々な取り組みを行っています。
インクルーシブなアプローチを中心に、社会と芸術をつなぐ事例をご紹介します。



公演の舞台裏

普段は縁の下の力持ちとして様々なかたちで公演を支え、
「舞台裏」で活躍するスタッフの技術やその仕事について取り上げます。
今回は[ピアノ調律師編]をお届けします。

アートシーン ▶ プレイバック

2023年上半期のダンスプログラムをふりかえる

長いコロナ禍を経て、県内の劇場にも再び活気が戻ってきました。

2023年上半期に開催されたなかから、神奈川のダンス文化の厚みを感じさせる取り組みをピックアップしてご紹介します。

文：呉宮百合香（舞踊評論）

キッドピボット

『リヴァイザー／検察官』

世界中のパレエ団から依頼を受ける人気振付家クリスタル・バイトのカンパニー〈キッドピボット〉が、待望の初来日を果たしました。ボイスオーバーを用いて言葉と身体をシンクロさせる唯一無二の手法は、ゴッゴリの戯曲『検察官』に基づく本作でも光ります。ドタバタの茶番劇から一転、セットが消えた抽象世界の中で先刻のシーンが脱構築され、水面下の深層／真相が表れる中盤以降の展開は驚き。音・光・動きが一体となった精緻な演出も、息を呑む完成度でした。

会場 | 神奈川県民ホール 大ホール

日程 | 2023年5月27日～28日

主催 | Dance Base Yokohama、神奈川県民ホール



写真：南部辰雄 写真提供：愛知県芸術劇場

OrganWorks2023

『漂幻する駝鳥』

主宰の平原慎太郎が作・演出・振付を手掛ける最新作のテーマは「渴き」。観客は箱庭を覗くように、舞台上の出来事を高みから俯瞰しているのですが、終盤に演者の一人が客席と同じ高さまで昇ってくることで、物語世界の中へと引き入れられることになります。富安由真による舞台美術は、何者かの記憶が留まる空間を陰影豊かに表現。そして個性豊かなゲストがカンパニーに新たな色を加えました。挑戦への強い意気込みを感じさせる公演でした。

会場 | KAAT 神奈川芸術劇場 中スタジオ

日程 | 2023年6月3日～11日

主催 | 株式会社クラネオ

写真：金子愛帆



鑑賞体験の更新に挑む意欲作が多く見られた2023年上半期となりました。新型コロナウイルスの5類移行に伴い、劇場における様々な制限も廃止され、以前のような活気が戻ってきました。

KAATは、2020年初演の『星の王子さまーサンリテグジュベリからの手紙』（演出・振付…森山開次）を新キャストを交えて、年明けに再演。美術・衣裳・音楽にも豪華アーティストが結集した話題作で、滋賀・広島・熊本の巡演先でも好評を博し

ました。同劇場ではこのほかにも、OrganWorks『漂幻する駝鳥』、櫛田祥光率いるDance Company『Lata ROOM』など、発展期にあるカンパニーの渾身の新作が上演されました。

STスポットは、既存の枠組みにとられないアーティストの活動を継続的に後押ししています。若手作家の発掘・育成のためのショーケース「ラボ20」は23回目を迎え、asamio『Family Unbalance』が本年のラボ・アワードを受賞しました。

梅田宏明ディレクション

『動態 | Moving State』

横浜赤レンガ倉庫1号館の振付家として活動最終年を迎えた梅田宏明。本公演では、梅田独自のメソッドに基づいてダンサーたちが自らの動きを生成・発展させていく過程をシンプルに見せる第1部と、劇場作品として映像・照明を加えて構成した第2部を組み合わせ、身体のムーブメントそのものに光を当てるアプローチ方法を多角的に提示しました。スタイルの違いを超えて若手が集う稀有なプラットフォームとしても機能していることがうかがえました。

会場 | 横浜赤レンガ倉庫1号館 3階ホール

日程 | 2023年6月24日～25日

主催 | Somatic Field Project

写真: S20



写真: 高野ユリカ

中屋敷 南 インスタレーション＋パフォーマンス

『みえないけどいる -touch the ghost skin-』

2020年よりノン・コンタクトワーク、つまり物理的に触れ合うことなしに「接触」の感覚を生み出すことを、映像技術を用いながら探求してきた中屋敷南。目を覆い離れた場所に位置取るダンサー二人の動きが、映像上で繊細かつ親密に重なり合う様子は、観る者の視覚と触覚を揺さぶります。会場内には新作と過去作の映像展示のほか、ノン・コンタクトワークを実際に体験できるインスタレーションもあり、子どもたちにも大人気でした。

会場 | BankART KAIKO

日程 | 2023年6月12日～18日

主催 | 中屋敷 南 / みんなのコンテンポラリーダンス

DAN

STスポットでは主催事業以外にも面白い取り組みがありました。ダンサー・荒悠平と彫刻家・大石麻央による『400才』は、公演当日までの3ヶ月間、作品の主人公であるサメの日常を描く映像作品をオンラインで定期配信し、舞台上に留まらない広がりを生み出しました。木村玲奈が中心となって進める『Steps』は、『Steps』を置いてみる① STスポット編』と題して、来場者の誰もが6段の階段から生まれるダンスを体験できる場を開きました。

オルタナティブな空間への志向は、近年ますます高まっているようです。アートのベースのBankART Stationでは小暮香帆がソロ活動10周年を記念して、音楽家・角銅真実と協働する『Dear』の改訂版を、BankART KAIKOでは中屋敷南が、映像作家・中瀬俊介とともに展開する『みえないけどいる -touch the ghost skin-』シリーズの最新作を発表しました。電車の音や人の気配、漏れ光といった様々なノイズを許容する演出はしなやかで、新たな風を感じさせます。

若手の登竜門である「マダカルシアター」に今回参加した仁田晶凱『The Musical Offering』と藤村港平『PredanceMusic』は、いずれも作曲

家をコラボレーターに迎えて音楽とダンスの関係をあらためて問い直す長期リサーチプロジェクトでした。理論と実践を行き来しながらの探究に、これからも要注目です。

そしてDance Base Yokohamaは、キッドビポット『リヴァイザ/検査官』のような大型の海外招聘公演を実現するだけでなく、レジデンス制度を通じて活動支援と機会の創出にも注力し、4月には登録ダンサーによる公開ショーイングも行いました。

横須賀芸術劇場では「高校ストリートダンススグランプリ2023」の決勝大会が初開催され、予選を勝ち抜いた30組が出場、二松学舎大学附属高等学校の〈Butterfly effect〉が見事優勝しました。2024年バリ五輪に向けて、ストリート熱は一層高まっていくことでしょう。

県民ホールでは、スターダンサーズ・バレエ団によるリラックスパフォーマンス『シンデレラ』を上演。劇場での鑑賞に慣れていなくても不安なく楽しめるよう、上演時間や音響・照明などを工夫した公演形態は、舞台芸術をあらゆる人に開いていくためにも、今後広がっていくことが望まれます。

2023年上半期の美術プログラムをふりかえる

芸術文化をより身近に、より楽しく感じてもらいたいという願いで、各地の劇場・ホールや美術館、団体は様々なかたちでイベントや展覧会を開催しています。2023年上半期に神奈川県下で開催された取り組みを紹介します。

文：浦島茂世（フリーライター）

子どもと大人の音楽堂〈大人編〉 「音楽堂のピクニック」

音楽堂の様々な場所を舞台に、現代美術家の山川冬樹や川村巨平斎が主宰する楽団「滞空時間」、能楽師の梅若紀彰など、アーティストたちがジャンルの枠を飛び越えて表現を行う、約6時間にもわたる「ピクニック」。音楽プロデューサーのKenji“Noiz”Nakamuraと美術作家の小金沢健人が演出を担当しました。鑑賞者たちは音楽堂のあちこちを移動しながらパフォーマンスを楽しみました。

会場 | 神奈川県立音楽堂
日程 | 2023年3月4日
主催 | 神奈川県立音楽堂



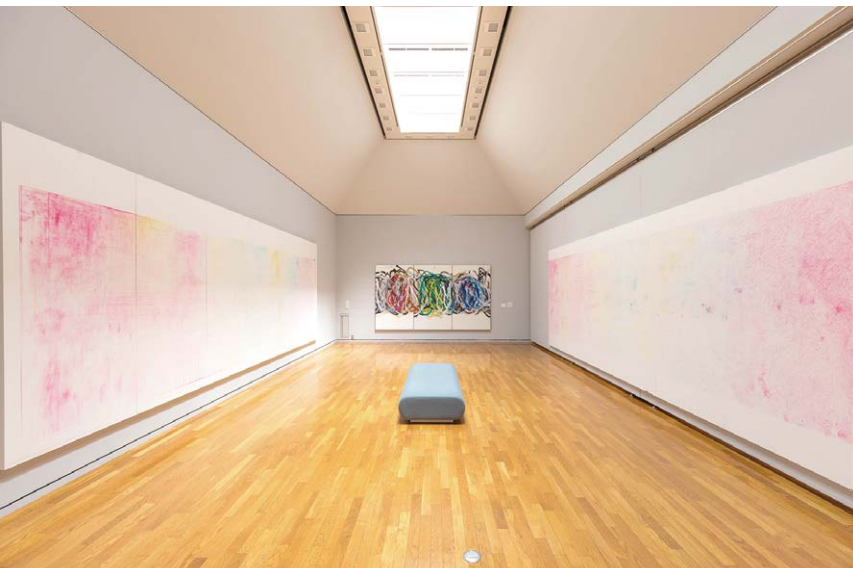
写真：雨宮透貴

「渉るあいだに佇む —美術館があるということ」

地域と美術館の関係をあらためて見直し、考えるための展覧会です。萬鉄五郎や速水御舟、井上有一など、茅ヶ崎にゆかりのある芸術家の作品と合わせて、茅ヶ崎の子どもと大人たちと機械がつくり上げた作品、茅ヶ崎のゴミでつくられた作品、美術館を訪れた人々や周辺に暮らす人の声を集めて構成された作品など、美術館開館後に生まれた作品も展示。来館者とともに美術館の過去や未来に思いをめぐらせました。

会場 | 茅ヶ崎市美術館
日程 | 2023年4月8日～6月11日
主催 | 公益財団法人茅ヶ崎市文化・スポーツ振興財団

写真：松永 勉



音楽堂で開催した「音楽堂のピクニック」は、10組のアーティストが、観客と一丸となり、前川國男が設計した音楽堂全体を使ったパフォーマンスを繰り広げる公演です。2回目となる今回の公演では、ステージはもちろんのこと、ロビーやホワイエを使ったパフォーマンスが繰り広げられました。時には音楽堂そのものを叩いて楽器にすることも。鈴木ヒラク+中山晃子+浅井裕介からなるドローイングトリオは、ダイナミックに、時には繊細にステージ上で絵を描き、その手元をカメラで撮影し

て映像をスクリーンに投影。幻想的な絵柄が生まれる過程が客席からもわかりやすく、大人も子どもも惹きつけられていました。K A A Tで開催した「K A A Tアトリウム映像プロジェクト vol.23 一原田裕規」では、劇場のエントランスに広がるアトリウムに、地球上に現存するすべての動物の名前を作家本人が約33時間にわたって朗読する、CGアニメーションと朗読を組み合わせた映像作品が上映されました。

神奈川県下でも、様々なジャンル

や枠組みを超えた展覧会が開催されています。茅ヶ崎市にある茅ヶ崎市美術館で開催された「渉るあいだに佇む―美術館があるということ」は、美術館の開館25周年を記念して企画された展覧会。茅ヶ崎市美術館は、茅ヶ崎にゆかりのある作家の作品のみならず、同時代を生きるアーティストたちとともに地域に関連した作品を制作する試みも行っています。地域に芸術家がいること、美術作品があること、つくること、そして美術館があることを来場者とともに考えていく展覧会となりました。箱根町のポーラ美術館では「部屋のみる夢―ボナールからティルマンス、現代の作家まで」を開催。19世紀から現代に至るまでの、部屋にまつわる作品を展示し、ステイホームを経験した私たちに、部屋とは、室内とはなにかを問いかけました。

美術館やホール以外の場所でも美術を楽しむという流れが広がっています。横浜市西区、みなとみらい21地区に2022年にグランドオープンしたオフィスビル「横浜ゲートタワー」は、2023年3月に「家族で楽しむSDGs×アートイベント」を開催。みなとみらい21地区の歴史やパブリックアートをめぐるまち歩きツアーなど、子どもたちもSDGsとアートをあわせて楽しめる



写真：加藤 健

イベントを開催しました。また、現在大規模改修工事のために長期休館中の横浜美術館は、横浜美術館正面のグランモール公園「美術の広場」に面した仮囲いに若手アーティストの作品を掲示。若手アーティスト、浦川大志による50mを超える作品《智能手机ヨリ横浜仮囲之図》は、みなとみらい地区をはなやかに彩る作品として、人々に訴えかけました。

神奈川県下では様々な美術プログラムが開催され、その内容は年々多様化しています。今後もさらに興味深いプログラムが期待されます。

New Artist Picks: Wall Project

「浦川 大志 | 掲示：智能手机ヨリ横浜仮囲之図」

長期休館中の横浜美術館は2007年より若手アーティストを紹介する展覧会「New Artist Picks」を定期的に行っています。「New Artist Picks: Wall Project」はこの展覧会の特別編。2回目となる今回は、浦川大志による新作を美術館を覆う工事用の仮囲いに掲示しました。横浜美術館や中華街など、この地域ゆかりのモチーフがふんだんにちりばめられた5枚からなる連作は、全長で50mを超える作品となっています。

会場 | 横浜美術館前仮囲い

日程 | 2022年11月14日～2023年7月31日

主催 | 横浜美術館(公益財団法人横浜市芸術文化振興財団)



写真：山中慎太郎

「部屋のみる夢―ボナールからティルマンス、現代の作家まで」

19世紀から現代に至るまでの「部屋」にまつわる作品を取り上げた展覧会です。時代が変遷するに伴い、部屋や、捉え方はどのように変わっていったのか。部屋や部屋でくつろぐ家族を描いたナビ派の画家、ピエール・ボナールから、自分のアトリエを撮影した写真家、ヴォルフガング・ティルマンスまで、様々な作品を手がかりに、パンデミックを通して変わった私たちの「部屋」のイメージを再構築しました。

会場 | ポーラ美術館

日程 | 2023年1月28日～7月2日

主催 | 公益財団法人ポーラ美術館振興財団 ポーラ美術館

ART



鑑賞サポートエリアから見た舞台の様子



客席に設置されたボディソニックの座布団と字幕用タブレット、ヘッドホン（左）とリアルタイム字幕の様子（右）



取材・文：米津いつか

写真：大野隆介

ミュージザの日2023 こどものためのウェルカム・コンサート

会場 | ミューザ川崎シンフォニーホール

日程 | 2023年7月1日

主催 | 川崎市、ミューザ川崎シンフォニーホール（川崎市文化財団グループ）

今号からの新連載となる本コーナーでは、社会と芸術文化をつなぐ様々な試みを取り上げていきます。今回はインクルーシブアプローチとして、7月1日の「ミュージザの日」にミューザ川崎シンフォニーホールで行われた「鑑賞サポート」を紹介します。

「ミュージザの日（7月1日）」は、2004年に誕生したミューザ川崎シンフォニーホールの開館記念日かつ川崎市の市制記念日です。市内の学校もお休みになるため「こどものためのウェルカム・コンサート」が毎年開かれています。子どもたちはもちろん、2017年より毎年この日に聴覚障がいのある方を対象とした鑑賞サポートのある公演が開催されています。

舞台上に近い客席の一区画が鑑賞サポートに対応するエリアに設定され、聞こえのレベルによって申込時に「ボディソニック（体感音響システム）」の「振動ザブトン」「ヘッドホン」「磁気誘導ループ」から好みのものを選べるほか、「リアルタイム字幕」も設置されています。また、手話通訳の方が1名、エリアと舞台の間にスタンバイ。「ボディソニック」はバイオニア株式会社が開発した、振動で音を伝える座布団型やポール型の機器と、ヘッドホンや磁気誘導ループを組み合わせて音を体感するシステムです。この日、川崎市在住のろう者の大山聡子さんが、「ボディソニック」の「振動ザブ



手話で鑑賞後の感想を語る大山聡子さん

トン」を選んで、コンサートを鑑賞しました。いくつかの席には、聞こえづらい方が演奏の音量を自身で調整して聞けるヘッドホンも用意されていました。また、2席に1つの間隔で「リアルタイム字幕」を表示するタブレットが座席に取り付けられていました。大山さんはクラシックのコンサートを鑑賞するのはこの日が初めて。コンサートの曲目は、メンデルスゾーンの「真夏の夜の夢」序曲と「ヴァイオリン協奏曲 水短調」です。

鑑賞後に大山さんは、「ボディソニックの座布団の振動が演者の動きとつながっているとわかり興味深かったです。ただ、振動がない時は『音はどこにいったんだろう？』と物足りなさのようなものも正直感じました。そういう時は、ヴァイオリンなど各奏者の動きを目で追って、イメージを自分の頭の中でつくって楽しんでいました」と、振動から伝わるものも手助けになり得ると感じたようです。ボディソニックは、低音域は振動がはっきり伝わるのですが、高音域は振動が弱く、わかりづらい時もあります。

また、リアルタイム字幕よりも手話

通訳を見ることが多く、同時性という点では手話通訳の方が優っていたと言います。「字幕を見てから演者を見るとタイムラグが出て目も疲れてしまうため、どちらか一つと言われたら手話通訳を選ぶけれど、両方あると選択できてよりよいです」。さらには、「タブレットに楽譜が映って視覚でもわかったらより音楽を楽しめるかもしれない」というアイデアも出てきました。今回の公演は、演奏の合間に「協奏曲」についての説明など、クラシックコンサートデビューをする子どもたちにもわかりやすい寸劇仕立てでの解説があり、「聞こえる・聞こえないに関係なく一緒に楽しむことができた」と大山さん。「理想を言えば、ふと手に取ったチラシのすべての公演に今日のようなサポートがあることです。今日の体験を通して音楽が身近に感じられました」と、今後への期待も語ってくださいました。



ロビーにはあらゆる人が空間を認識できるようホールの「触る模型」も
写真：平舘 平

公演の裏舞台

ピアノ調律師編

聞き手・文：猪上杉子

※本インタビューのロングバージョンはWEBに掲載しています。

ピアノ調律技能士

河内克彦

〔かわち・かつひこ〕 有限会社ポリムニア代表。1987年より調律師として神奈川県内のコンサートホールや音楽大学などのピアノとパイプオルガンの保守管理を担当。これまで行った音楽堂と県民ホールでのコンサート調律は数百回に及ぶ。



「ここ音楽堂は、調律師としての僕を育ててもらった母校です」と話す河内さん 写真：大野隆介



調律で使うハンマー(左)と、鍵盤の深さを調整する紙製のパンチング(中央)、調律中の様子(右) 写真：大野隆介

「舞台裏」で公演を支えるスタッフたちの「技術」をお伝えする本コーナー。今回は、音楽堂や県民ホールで長年にわたり調律師として何百もの公演に関わった河内克彦さんに、仕事の内容や意義をお話しいただきました。

——ピアニストにとって調律師はどんな存在なのでしょう？

ピアニストは公演に自分の楽器を持ち歩けないため、コンサートホールに着くまでどんなピアノを弾くのか不安でいっぱいです。初めてお会いするピアニストにも安心して公演に臨んでいただけるように、より良い状態のピアノを用意して迎えます。さらには、それぞれのピアニストの求める音楽表現のために、調律だけでなく、鍵盤のタッチや音色のイントネーションを整えることが必要になるので、希望を聞き取って、細かく調整していきます。リハーサルを客席で聴くうちに、ピアニストの求めていることを感じて、再調整したりします。

——具体的にはどうやってタッチを整えるのですか？

様々な調整があるのですが、例えば鍵盤の深さを調整するために、鍵盤の下に入っている厚さの違う紙を抜いたり足したりします。一番薄い紙は0.1mmですが、ピアニストはその微妙

なタッチを感じとってピアノを自分のものにしていきます。

——公演当日のスケジュールは？

ソロリサイタルの夜公演の場合は——9時から15時まで調律、15時から17時までリハーサルを聴く、17時から開演直前まで整音の仕上げ、19時から21時までコンサート本番中は舞台袖で待機する、22時にピアノを片付けて退館、というものです。しかし、オーケストラと共演する協奏曲の昼公演ともなれば、楽器搬入、舞台や照明のセッティング、団員さんたちの音出しなどが一斉に始まります。ピアノ調律に割り当てられる時間も限られ、喧騒のなかでの作業なので、また別の経験とスキルが要求されます。

——調律師に一番大切な素質とは？

「音をつくる」ためには、「音を聴く力」が必要です。演奏会や公開レッスンなどに足繁く通い、数多くの録音を比較したりしながら、演奏家は何を求めて何に苦労しているのかを理解できればなりません。聴く力を養うために、音楽だけでなく美術館に行ったり、カメラを始めたりして感性を培うようにしています。調律師は公演のための舞台スタッフの一員。ピアニストが最高の演奏ができるようにお手伝いする職人だという自負を忘れないようにしています。

完全フル装備の家®で叶える平屋



詳しくはこちら



富士住建



神奈川芸術プレス 読者アンケート

神奈川芸術プレス (vol.163) をお読みいただき、ありがとうございました。アンケートにお答えいただいた方のなかから、抽選で1組2名様を、2023年11月22日(水)19:00開演 KAAT 神奈川芸術劇場 プロデュース『SHELL』(KAAT 神奈川芸術劇場(ホール))にご招待いたします。今後の誌面づくりに生かすため、ぜひご意見・ご感想をお寄せください。

アンケート項目

1. 神奈川芸術プレスはいかがでしたか。ご意見・ご感想を教えてください。
2. 今号で印象に残った記事を教えてください。
3. 次号以降、読んでみたい特集テーマがあれば教えてください。
4. 今気になっている「ひと」や「こと」、「場所」などがあれば教えてください。
5. 神奈川芸術プレスをどちらで手に取りましたか？

応募方法：「WEBアンケートフォーム」もしくは「はがき」に、アンケートの答えと、メールアドレスを明記のうえ、ご応募ください。

WEBアンケートフォーム：https://krs.bz/kanagawaaf/m?f=1466

はがき郵送先：〒231-0023 横浜市中区山下町3-1

(公財) 神奈川芸術文化財団 神奈川芸術プレス読者アンケート係

回答期限／はがき必着：2023年10月31日(火)

当選発表：厳正なる抽選のうえ、当選者の発表はメール送信をもってかえさせていただきます。

- ・当選に関するお問い合わせには回答いたしかねます。
- ・当選通知メールは、kaf@kanagawa-af.org のアドレスから送付予定です。
上記ドメインからのメールを受信できるよう、設定をご確認ください。
- ・メールアドレスの間違い等でメールが送信できない場合は、当選を無効にさせていただきます場合があります。
※お申し込み時にいただいた個人情報は、当選通知以外の目的には使用いたしません。



WEBアンケート
フォームはこちら

今号のプレゼント



KAAT 神奈川芸術劇場プロデュース

『SHELL』

倉持裕×杉原邦生注目の初タッグでお送りする
現代を舞台に特異な人間が存在する
不思議な世界を描く、青春ファンタジー！

作：倉持 裕 演出：杉原邦生 音楽：原口沙輔

出演：石井杏奈 秋田汐梨

岡田義徳 ほか

ご支援のお願い

神奈川芸術文化財団は、心豊かな芸術文化の創造に寄与するとともに、神奈川の地から世界に向けてその発信を回することを使命として活動しております。活動の継続にはご支援が大きな支えになります。皆様のご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

- 賛助会員：1年を通じて事業全般にご支援をいただきます。個人賛助会員：30,000円(1口/1年) 法人賛助会員：100,000円(1口/1年)
- 個別協賛：当財団が主催する特定の公演・事業にご支援をいただきます。個人：30,000円～ 法人：100,000円～
- オンライン小口寄付：1,000円からクレジットカードで気軽にご寄付いただけます。

賛助会員の特典

- ご芳名を掲載します。○財団主催公演のなかから選定した公演にご招待いたします。○主催公演のチケットを10%引きでご購入いただけます。○限定イベントにご招待いたします。
- 神奈川芸術プレス(年2回発行)をお送りします。○最新のチケット情報をメールでお送りします。

お問い合わせ・お申し込み

(公財) 神奈川芸術文化財団 経営企画課 <https://www.kanagawa-arts.or.jp/support> 電話：045-633-3760(9:00～17:00/土日祝日・年末年始を除く)

(公財) 神奈川芸術文化財団 賛助会員・協賛・協力・寄付 ご芳名

五十音順・敬称略(2023年7月31日現在)

【賛助会員】

法人賛助会員：株式会社アクトエンジニアリング / アズビル株式会社 / 学校法人岩崎学園 / 株式会社ヴォートル / 株式会社エス・シー・アライアンス / 株式会社NHKアート / 鹿島建設株式会社横浜支店 / 株式会社勝烈庵 / 一般財団法人神奈川県教育福祉振興会 / 株式会社神奈川孔文社 / 株式会社神奈川保健事業社 / 神谷コーポレーション株式会社 / カヤバCS株式会社 / 川本工業株式会社 / 株式会社共栄社 / 株式会社KSP / 株式会社合同通信 / 株式会社ジェイコム湘南・神奈川 / 株式会社シグマコミュニケーションズ / 株式会社清光社 / 株式会社テレビ神奈川 / 東工株式会社 / 株式会社日建設計 / 日成工事株式会社 / 日生商工株式会社 / 日総ブレイン株式会社 / 日本発条株式会社 / 株式会社野木印刷社 / パナソニックEWエンジニアリング株式会社 / Piascore株式会社 / 平安堂薬局 / 株式会社ホテル、ニューグランド / 一般社団法人本牧関連産業振興協会 / 丸茂電機株式会社 / 三沢電機株式会社 / 森平舞台機構株式会社 / ヤマハサウンドシステム株式会社 / 株式会社有隣堂 / 株式会社豊商會 / 株式会社ユニコーン / 株式会社横浜アーティスト / 横浜信用金庫 / 弁護士法人横浜パートナー法律事務所 / 横浜ビルシステム株式会社 / 株式会社ワイイーソリューションズ / 匿名 2社

永年個人賛助会員：川村恒明 / 小山明枝

個人賛助会員：味田健一 / 小川 浩 / 黒瀬博晴 / 鈴木真由美 / 高岡俊之 / 高野伊久男 / 戸張 実 / 中澤正正 / 橋本尚子 / 松森 繁 / 匿名 6名

【協賛・協力・寄付】

能舞台協賛：ナイス株式会社

個別協賛：株式会社アートフロントギャラリー / アクセンチュア 芸術部 / Accenture Art Salon / MMcc(みなとみらいコミュニティクラブ) / リコー社会貢献クラブ・FreeWill / 株式会社ルーク / 匿名 1社

協力：株式会社崎陽軒 / 株式会社富士住建

一般寄付：匿名 1名

神奈川芸術プレス vol.163 発行：公益財団法人神奈川芸術文化財団 TEL:045-663-3711

2023年(令和5年)9月21日 発行

企画・制作：公益財団法人神奈川芸術文化財団、株式会社ボイズ

編集ディレクション：及位友美(voids) 編集：米津いつか、安部見空・中尾江利(voids) 企画協力：山崎健太

デザイン：岡部正裕(voids) + 三浦佑介(shubidua) イラストレーション：白尾可奈子 校正・校閲：聚珍社 印刷：深雪印刷

神奈川芸術プレス
WEB版はこちらから



【禁無断転載・複写】無料配布

※本誌掲載情報は2023年9月5日現在のもの